

都市建築の高層化によるスカイラインの出現

20 世紀初頭におけるアメリカの記号技術

東京大学 青山賢治

【目的】 本発表は、アメリカの大都市で、中心部の都市開発が高層化へ向かう局面について調査、分析するものである。ニューヨーク、シカゴという二つの大都市では、19 世紀末から、中心部における建築物の高層化が起こった。余分な装飾を削り、ガラスや鉄骨などの素材を表面に配した建築群は、スカイスクレイパーと称され、互いに競い合うように高度を上げていった。1920 年代以降、ル・コルビュジエらをつうじてヨーロッパでもスカイスクレイパーの導入が進んだものの、世界一の高層化をめぐる競合は、マンハッタンやシカゴを舞台とするものであり続けた。都市開発を宙空へと引き上げてスカイラインを出現させるというアメリカ大都市の空間編成は、開発上の合理性には還元できず、巨大化を介して作用する記号技術として分析される必要がある。

【方法と分析内容】 スカイスクレイパーの定義とその歴史的な展開については、S. ギーディオンははじめ近代建築史のなかで語られてきた。鉄鋼やガラスという産業化以降の素材利用、エレベーターや空調管理といった技術の導入、内部と外部の対応関係など、スカイスクレイパーをそれ以前の建築と区別する基準について、多くの論点が提出されている。素材、構造、形態、技術にかんする変化を介して、都市の高層建築にはどのような機能を果たすようになり、そこにどのような美の探求が認められたか。これらの問いをつうじて、近代的建築としてのスカイスクレイパーが対象化されてきた。

もっとも、スカイスクレイパーの登場は、ひとつの作品や建築物という単位で起こったことではない。都市論では、ニューヨークのマンハッタンおよびシカゴの環状鉄道が、すでに限定された外縁をもっていたことから、都市が水平方向に拡大せず、垂直方向へ高層化したともいわれる。限られた土地面積ゆえに、地価上昇は避けられず、高層化によって建築の容積率を増やすことが合理的選択であったといわれる。

だが、スカイスクレイパーの建設が、実際にそのコストに見合うものであったかについては、当時から疑念が向けられていた。企業名を冠するスカイスクレイパー群は、既存の建築を谷底へ埋没させるほどのスケールで際立つことで、はじめてスカイラインに自らを刻むことができた。そこへ参入することが象徴的価値をもつかのように語られるスカイラインとは、どのように出現したのか。T. レーウエンが問題提起したように、そもそも空無であるはずの宙空が、未踏の領野として発見され、より巨大な建築を築こうとする競争の舞台へと転じられたことには、合理化しえない過剰がある。都市開発の最前線が土地から空中へと向かい、そこに新たな象徴的空間が成立するにいたる出来事を、ここでは系譜学的に分析する。

【結論】 新技術の援用により参入可能な領野を広げ、競合を呼び込むような空白地帯を創出することは、「新大陸」としてのアメリカがくり返し自らを証明する舞台であった。西部開拓期とは異なり、スカイスクレイパー建設はどこでも反復可能な技術であり、空という無限の表象をつうじて、内閉的であるにもかかわらず世界性へ開かれるかのような記号論的空間を出現させた。J. ボードリヤールや R. コールハースが論じたように、シミュラクルの増殖、グリッドとボイドの反復により、後に象徴的空間の解体をもたらすことになる原理もそこに作用していた。

【参考】 Le Corbusier, *Quand les Cathédrales étaient blanches*, 1937.

Thomas Leeuwen, *The Skyward Trend of Thought: Metaphysics of the American Skyscraper*, 1986.

Rem Koolhaas, *Delirious New York: A Retrospective Manifesto for Manhattan*, 1978.